

「まち」の企業訪問 元気じるし登場

227

(有)小国和紙生産組合 (小国町商工会)



左；千尋さん 右；宏明さん

和紙の仕事との関わり

長岡市小国町は周囲を山に囲まれた独特の地形が「小国」の名前の由来といわれ、農業をはじめ、紙すきの産地としても知られています。

今回は、手漉き和紙の工房『(有)小国和紙生産組合』を訪ね、副工房長の今井千尋さんにお話しを伺いました。

無形文化材 小国和紙

小国町では、古くから農閑期の農家の副業として和紙製造が行われ、貴重な冬季の収入源でした。小国和紙は「楮」の木をつかう事で耐久性、強靱性、光沢にすぐれ、伝統的技法である「かんぐれ」「天



日干し」という雪を活用した独特の工法で国の無形文化材に指定されています。

時代の流れとともに失われつつあった貴重なその工法と文化は、地域に大切に受け継がれています。

和紙へのこだわりと新たな可能性

勤めもあり千尋さんは美術学校卒業後に迷わずこの仕事に携わり、現在ではご主人と二人三脚で経営されています。

今でこそ、商いとして独り立ちしていますが、始めて間もない頃は工務店の後ろ盾がなければ成り立ちませんでした。納得できる製品を作り上げるための仕事を学ぶと同時に、独り立ちすることが目標でもありました。

工務店を経営している千尋さんの父が冬季雇用促進事業の一環として、小国和紙を後世に残す目的で、昭和59年に和紙工房を始めました。父の

和紙が出来上がるまでに一般的に9工程余りを経ますが小国和紙では加えて3工程があります。現在はある程度機械化されていますが、どの作業も気の遠くなるような手間がかかっています。「漉く仕事は水仕事ですが体をつかうので汗だらだら、紙を乾燥するのは火の仕事、体力をつかいますよ。」と三人のお子さん、笑顔で話されます。

また、納得できる製品を提供するため妥協はしません。品質のよい紙を作るための楮を自家栽培で作り、地産100パーセントの紙作りが可能



ショールーム

です。

こうした和紙へのこだわりと共に、新たな商品開発にも意欲的に取り組んでおり、中でも酒造メーカーから受注している日本酒に貼るラベルや着物の札紙は工房の土台を築いています。さらに、デザインと提携して葉書、便箋、名刺、壁紙やふすま、といった和紙の特徴を生かした製品開発も進められています。

和紙の伝承と地域活性化

現在、日本の和紙界は後継者のいない苦しい状況におかれています。工房には8人の職人さんがいますが、若い方も多く長く続けてほしいと技術の伝承と後継者の育成にも励んでいます。

千尋さんは、そのような状

況を少しでも改善するため、和紙を広くPRすることも重要だと考え、3年前には小国和紙の様々な用途を紹介するショールームを国道沿いにオープンしました。さらに、様々な地域との関わりにも積極的に取り組み、7月に長岡市内13商工会が集まり盛大に開催された「地域自慢商工会フェスタ2014」にワークショップを設置し、小国和紙のPRをしました。

また、工房では学校の授業協力を行っており年間500人もの子供たちが見学に訪れ、本物の和紙での工作体験や卒業証書の作成などもしています。

「和紙づくりは風土が育てた地域文化です。大切に受け継いでいきたいですね」と、千尋さんは小国和紙への想いを語ります。

雪国ならではの技法に支えられた小国和紙は、千尋さんご夫婦の情熱と共に受け継がれています。

【お問い合わせ】

(有)小国和紙生産組合

〒949-5341

長岡市小国町小栗山145

TEL 0258-95-3016

fax 0258-95-3164

http://www.oguniwashi.jp/